

# 湯ヶ原ゆき

国木田独歩

青空文庫



定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて来て見ると案  
 外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふ  
 は部室數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居な  
 がら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違  
 つたが先づく繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想  
 外の室に入つた。

元來自分は大的無性者にて思ひ立た旅行もなか／＼實  
 行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勸告

でヤツと出掛けることになつたのである。『其處に骨の人行く』といふ文句それ自身がふらくくと新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兔も角、一汽車乗り遅れたのである。

同伴者は親類の義母であつた。此人は途中萬事自分の世話を焼いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り届ける役を  
もつて居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちましようか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから』  
と自分がいふと

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラット  
 ホームで一時間以上も待つことゝなつた。十一時頃から熱が出  
 て來たので自分はプラットホームの眞中に設けある四方硝子  
 張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる義母は  
 そんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見た  
 り、煙草を喫て見たり、自分が折り折り話しかけても只だ『ハア』  
 『そう』と答へらるゝだけで、沈々黙々、空々漠々、三  
 日でも斯うして待ちますよといはぬ計り、悠然、泰然、茫  
 然、杳然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から  
 來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注  
 意を幸にそれに乗りに込むと果して同乗者は老人夫婦きり

すこぶすいで頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱よわつて居る身體をドツかと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさおもうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るもの、  
梅雨季は争はれず、天際は重い雨雲が被り重なつて居た。汽き車は御丁寧ごていねいに各驛かくえきを拾つてゆく。

『義母 此處は梅で名高ひ蒲田です。』

『そう?』

『義母 田植が盛んですね。』

『そうね。』

『御覽なさい、眞紅な帯を結めて居る娘も居ますよ。』

『そうね。』

『おつかさん 川崎へ着きました。』

『そうね。』

『おつかさん お大師様へ何度お参りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病 人か分なくなつた。自分も断念めて眼を

ふさいだ。

二

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。

僅かの假寢ではあるが、それでも氣分がサツパリして多少か元氣が附いたので懲ずまに義母に『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないことゝ自分も斷念めて咽喉疾には大敵と知りながら煙草を喫い初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種々の問題を持出して居るやうだそして多少か煩いといふ氣味で男はそれに説明を與へて居たが随分丁寧な者で決して『ハア』『そう』の比ではない。

若し或人が義母の脊後から其脊中をトンと叩いて『義母！』と叫んだら『オ、』と驚いて四邊をきよろ／＼見廻して



はじめ初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が  
 附くだらう。全體旅をしながら何物をも見ず、見ても何等の  
 感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合て更に  
 興を増すこともしないなら、初めから其人は旅の面白みを知  
 らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると  
 『あれは何でしょう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなも  
 の。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まあ貴下あなたあれが見えないの。ア、最早見えなくなつた。』と老婦人は残念ざんねんさうに舌打したうちをした。義母おつかさんは一寸ちよつと其方そのほうをみたばかり此時このとき自分じぶんは思つた義母おつかさんよりか老婦人らうふじんの方が幸あはせ福あはせだと。

そこで自分じぶんは『對話』たいわといふことに就て考へ初めた、大袈裟おほげさに言へば『對話哲學』たいわてつがく又たの名なを『お喋舌哲學』しゃべりてつがくに就て。自分じぶんは先づ劈頭へきとう第一に『喋舌しゃべる事ことの出來ない者ものは大馬鹿おほばかである』

『喋舌しゃべることの出来できないのを稱しょうして大馬鹿おほばかだといふは餘り殘酷あまひどいかも知しれないが、少すくくとも喋舌しゃべらないことを以もつて甚ひどく自分じぶんで豪えがる者ものは馬鹿者ばかもものの骨頂こつちやうと言いつて可よろしい而そして此種このしゆの馬鹿ばか者ものを今いまの世よにチヨイ／＼見受みうけるには情なさけない次第しだいである。』

『旅たびは道連みちづれ、世よは情なさけといふが、世よは情なさけであらうと無なからうと別べつもんだい問題もんだいとして旅たびの道連みちづれは難有ありがたい、マサカ獨ひとりでは喋舌しゃべれないが二人ふたりなら對手あひてが泥棒どろぼうであつても喋舌しゃべりながら歩あるくことが出來できる。』など、それからそれと考かんがへて居ゐるうち又眠まねむくなつて來きた。

睡眠ねむりは安息あんそくだ。自分じぶんは眠ねむることが何なにより好すきである。けれど爲しようことなしに眠ねむるのはあたら一生しやうがい涯げの一部分ぶぶんをたゞで失なく

すやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。

幾分位眠つたか知らぬが夢 現の中に次のやうな談話が途斷れ  
くゝに耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『……甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひましょう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうでもある。まして沈黙家の特長として義母も必定さうだらうと、

『義母 お腹が空きましたらう。』

『イ、エ、それでも有りませんよ。』

『おほふな 大船へ着いたら何か食べましょう。』

『こんど 今度が 大船ですか。』

『わたしは眠て居たから能く分りませんが、』と言ひながら外景を見  
ると丘山樹林の容様が正にそれなので

『エ、最早直ぐ大船です。』

『たいへんはや 大變早いこと！』

#### 四

おほふな 大船に着くや 老夫婦が逸早く押ずしと辨當を買ひこ  
んだのを見て自分も其眞似をして同じものを求めた。頸筋は豚

に似て聲までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。

自分は先づ押ずしなるものを一つ摘んで見たが酢が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがポロ／＼飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分、別に苦にもならず總てを義母におまかせ茶ばかり飲んで内心一の悔を懐きながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。

『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の悔である。大船を發して了へば最早國府津へ

つ着くの待つ外、途、中何も得ることは出来ないと思ふと、淺間  
 しい事には猶ほ残念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打て呉れた、と思  
 ふと大違の眞中。義母は今しも下を向て蒲鉾を食ひ  
 欠いで居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空  
 箱の一には笹葉が残り一には煮肴の汁の痕だけが残つて居  
 る奴をかたづけ、腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱  
 を丁寧を重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。  
 最も左様する前に老人と小聲で一寸と相談があつたらしく、

かねかし  
金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな様子を首の  
振り方で見せてたのであつた。

このふたつ  
此 一一の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女

うが三人ばかり老人夫婦を出迎に出て居て、其一人が窓から  
わたつた包を大事さうに受取つた。其中には空虚の折箱も三ツ入  
つて居るのである。

きしや  
汽車が大磯を出ると直ぐ（吾等二人ぎりになつたので）  
おつかさんいま  
『義母今の連中は何者でしょう。』

いま  
『今のツて何に？』

いまおほいそ  
『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ』



『必きつ定と金かね貸かしか何なんかですよ。』

『さうですかね』

『でなくても左さう様み見えますね』

『婆ばあ様さんは上かみ方が者たものですよ、ツルリンとした顔かほの何ど處つかに「間まぬ拔けの

狡かう猾くわつ」とでも言いつたやうな所ところがあつて、ペチャクリちいく老さい

爺んの氣き嫌げんを取とつて居ゐましたね。』

『さうでしたか』

『妾めかけの古ふる手てかも知しれない。』

『貴あなた君たも随ずる分ぶん口くちが悪わるいね』とか何なんとか義おつか母さんが言いつて呉くれる

と、益ます々く悪あく口こう雜ざい言ごんの眞しん價かを發はつ揮きするのだけれども、自じ分ぶんの

は合あい憎にく甘うまい言ことをトんく拍びやう子しで言いひ合あふやうな對あひ手てでないか

ら、間の抜けるのも是非がない。

## 五

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで來ると最早目的地の傍まで着ゐた氣がして心も勇むのが常であるが、自分等ふたりは全然そんな様子もなかつた。不好きな處へいやくながら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無承にプラツトホームを出て、紅帽に案内されて兔も角も茶屋に入つた。義母は兔につまゝられたやうな顔つきをして、自分は狼につまゝられたやうに顔をして（多分他から見ると其様顔であつたらうと思ふ）

『やれ〜』とも『先づ〜』とも何とも言はず女中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は義母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、義母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コツプであほつた。義母の來た時は最早コツプも空壇も無い。

思ひきや此藝當を見ながら

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入て來た者がある。

可愛さうに景氣のよい聲、肺臓から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立上つた。見れば友人

M君である。

『何處へ？』彼は問ふた。

『湯ヶ原へ行く積りで出て來たのだ。』

『湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが此頃の天氣じゃアうんざりするナ

ア』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行て居たのだが、

雨ばかりで閉口したから、これから歸京うと思ふんだ。』

『湯ヶ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽きくした。』

平凡な會話じゃアないか。平常なら當然の挨拶だ。

併し自分しかにじぶんは友ともと別わかれて電車でんしやに乗のつた後あとでも氣持きもちがすがくして  
 清涼劑せいりやうざいを飲のんだやうな氣きがした。おまけに先刻さつきの手早てばやき藝げいた  
 當うが其效果そのきくめを現あらはして來きたので、自分じぶんは自分じぶんと腹はらが定きまり、車しや  
 窓さうから雲霧うんむに埋うもれた山々やまくを眺ながめ

『走れ走れ電車でんしや、』

圓太郎馬車えんたらうばしやのやうに喇叭らつぱを吹ふいて呉くれると更さらに妙めうだと思おもつた。

## 六

小田原をだはらは街まちまで長ながい其入そのいりぐち口くちまで來くると細雨こさめが降ふりだしたが、  
 それも降ふりみ降ふらずみ降ふらずみたいした事こともなく人車じんしや鐵道てつだうの發車はつしやてん點

へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ない  
 いと聞いて茶屋へ上り今度は大ぴらで一本命じて空腹へ刺身を  
 少ばかり入れて見たが、悪酒なるが故のみならず元來八度  
 以上の熱ある病人、甘味からう筈がない。悉くやめてごろ  
 り轉がるのがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行し  
 て旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもので、「疲勞の  
 美味」とでも言はうか、然し自分の場合はそんなところではなく  
 病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、  
 最早や身動きするのもしやになつた。

しかし時間が來れば動かぬわけにいかない只だ人車鐵道さ  
 へ終れば最早着るたも同様と其を力に箱に入ると中等は我

れ家たり  
等二人ぎり廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐れ入ると  
おも  
思つて居ると、  
巡査が二人入つて來た。

ひとり  
一人は張飛の瘦て弱くなつたやうな  
中老の人物。一人  
は關羽が鬚髯を剃り落して退隱したやうな  
中老以上の  
人物。

や  
腹せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、  
さいとうじゆんさ  
齋藤巡査と稱し、  
たいゝん  
退隱の關羽は鈴木巡査といつて湯ヶ  
はらきんむ  
原に勤務すること實に九年以上であるといふことは、  
あとわか  
後で解つたのである。

自分の注文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

## 七

自分じぶんは如何どういふものかガタ馬車ばしやの喇叭らつぱが好きすだ。回くわいさう想もも聯れ

想も皆みなな面おも白しろい。春はるの野路のぢをガタ馬車ばしやが走はしる、野のは菜なの花はなが

咲さき亂みだれて居ゐる、フワリなまぬるくと生かぜ温ふい風ふが吹はなかほりせまて花はなの香かほりが狭せまい

窓まどから人ひとの面おもを掠かすめる、此このとき時ぎ御者よしやが陽氣やうきな調子てうしで喇叭らつぱを吹ふき

たてる。如何いく嫁よめいびりの胡麻ごましる白は婆あさんでも此このとき時ときだけはのんび

りして幾干いくらか善ぜん心しんに立たちかへるだらうと思おもはれる。夏なつも可よし、

清明せいめいの季節きせつに高た地ちの旦道たんだうを走はしる時ときなど更さらに可よし。

ところが小田原をだはらから熱海あたみまでの人車じんしや鐵道てつだうに此喇叭このらつぱがある。

不愉快ふゆくわい千萬このかうな此交通かうつう機關きくわんに此鳴物このなりものが附ついてる丈だけで如何どう



か興きようを助たすけて居ゐるとは兼かねて自分じぶんの思おもつて居ゐたところである。

先まづ二臺だいの三等とうしや車つぎ、次つぎに二等とうしや車つぎが一臺だい、此この三臺だいが一列れつになつてゴロくくと停てい車しや場ぢやうを出でて、暫しばら時らくは小田原をだはらの場末ばすゑの家いへ立たの間あひだを上のぼりには人ひとが押おくだりくるまはし、走るはし時は喇叭らつぱを吹ふいて進すすんだ。

愈い々よ々よ 《いよく》 平地へいちを離はなれて山路やまちにかゝると、これからが初はじまりと言いつた調子てうしで張ちやう飛ひ巡じゆん査さは何處どこからか煙管きせると煙草たばこ入いれを出だしたがマツチがない。關羽くわんうも持もつて居ゐない。これを見みた義おつかさ母おもは徐むろに袖そでから取とり出して

『どうかお使つかひ下くださいまし。』

と丁寧ていねいに言いつた。

『これはく。如何もマツチを忘れたといふやつは始末にいかんもので。』

と巡查は一ぷく點火てマツチを義母に返すと義母は生  
まじめな顔をして、それを受取つて自身も煙草を喫いはじめた。  
別に海洋の絶景を眺めやうともせられない。

どんより曇つて折りく小雨さへ降る天氣ではあるが、風が全  
く無いので、相摸灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。  
噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居る。

『義母 どうです、佳い景色ですね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう？』

このときふたり  
 此時二人の  
 鏡がねをかけて、  
 人車じんしゃは上のぼりだからゴロゴロと徐行じようかうして居ゐた。  
 巡查じゆんさは新聞しんぶんを讀よんで居ゐた。  
 關羽くわんう巡查じゆんさは眼め

## 八

景色けしきは大おほきいが變化へんくわに乏とほしいから初はじめての人ひとなら兔とも角かく、自分じぶん  
 は既すでに幾いくたび度どか此海このうみと此棧道このさんだうに慣なれて居ゐるから強しひて眺ながめたく  
 もない。義母おつかさんが定さだめし珍めづらしがるだらうと思おもつて居ゐたのが、例れい  
 の如ごとく簡單かんたんな御挨拶ごあいさつだけだから張合はりあひが抜ぬけて了しまつた。新しんぶ  
 聞きは今朝けさ出でる前まへに讀よみ盡つくして了しまつたし、本ほんを讀よむ元氣げんきもなし、

眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然何時か義母の氣が自分に乗り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡查は此處で初め新聞を手離した。自分はホツと呼吸を我に返つた。義母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない  
『此處で又暫時く待たされるのか。』

と眞鶴まなづるの巡査じゆんさ、則ち張飛すなは巡査ちやうひじゆんさが言つたので

『いつも此處こゝで待たまされるのですか。』  
と自分じぶんは思はずおも問ふた。

『さうとも限りかぎませんが熱海あたみが遅おそくなると五分ぶんや十分ぶんこ此處こゝで待たまされるのです。』

壯丁さうていは車くるまを離はなれて水みづを呑のむもあり、皆掛茶屋みなかけぢやの縁えんに集あつつて  
休やすんで居ゐた。此處こゝは谷間たにまに據よる一小村せうそんで急斜面きふしやめんは茅屋くさやが段だんを  
作つくつて叢むらつて居ゐるらしい、車くるまを出でて見みないから能よくは解わからないが  
漁村ぎよそんの小なる者もの、蜜柑みかんが山やまの産物さんぶつらしい。人車じんしやの軌道きだうは村  
の上端じやうたんを横よこつて居ゐる。

雨がポツポツ降ふつて居ゐる。自分じぶんは山やまの手ての方ほうをのみ見みて居ゐた。

はじめは何心なく見るともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

## 九

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅屋がある。母屋の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に橢圓形の据風呂があつて十二三の少年

が入はひつて居ゐるのが最さい初しよ自じ分ぶんの注ちゆう意いを惹ひいた。此この少せう年ねんは其その日ひ  
 に焼やけた脊せな中なかばかり此こち方らに向むけて居ゐて決けつして人じん車しゃの方ほうを見みない。  
 立たつたり、しやがんだりして居ゐるばかりで、手て拭ぬぐも持もつて居ゐない  
 らし、又また何い時つ出でる風ふうも見みえず、三じ時かん間かんでも五じ時かん間かんでも一日いちでも、  
 あアやつて居ゐるのだらうと自じ分ぶんには思おもはれた。廣ひろ庭にはに向むいた釜かまの  
 口くちから青あをい煙けむが細ほそ々々と立たち騰のぼつて軒のき先さきを掠かすめ、ボツく雨あめ  
 が其その中なかを透すかして落おちて居ゐる。半はん分ぶん見みえる土ど間までは二に十じう四し五ごの女をんな  
 が手て拭ぬぐを姉ねえ様さまかぶりにして上ありがまちに大おほ盃だら程ひほどの桶をけを控ひか  
 へ何なに物ものかを篩ふるひにかけて專せん念ねん一い意いの體てい、其その桶をけを前まへに七しちツ八はちツ  
 の小こ女むすめが坐すわりこんで見けん物ぶつして居ゐるが、これこれは人にん形ぎやうのやう  
 に動うごかない、風ふう呂ろの中なかの少せう年ねんも同おなじくこれを見けん物ぶつして居ゐるの

だといふことが自分にやつと解つた。

いりくち あちら 入口の彼方は長い縁側で三人も小女が坐つて居て其一人は

こちら む 此方を向き今しも十七八の姉様に髪を結つて貰ふ最中。前

髪を切り下て可愛く之も人形のやうに順しくして居る廣庭で

は六十 いじやう 上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立て居て

其一人の赤兒 あかんぼ を脊負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張

上げて喋白つて居ると、他の二人の婆様は合槌を打つて居る。

けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年

頃の小供 こども がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り巻

て居るのである。

眞黒 まつくろ な艶 つや の佳 い い洋犬 かめ が一匹 びき、腮 あご を地 ぢ に着 つ けて臥 ね べつて、耳 みみ を



垂れたまゝ是れ亦尾をすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そして母屋の入口の軒陰から燕が出たり入つたりして居る。初めは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生、活の最も静かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生悠久の流が此處でも泡立ぬまでの渦を卷めて居るのである。

## 十

随分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたてゝ下つて來たので直ぐ入れ

ちがつて我々われくは出立しゅつたつした。

雨が次第しだいに強つよくなつたので外面そとの模様もやうは陰鬱いんうつになるばかり、

車内うちは退屈たいくつを増ますばかり眞鶴まなづるの巡查じゆんさがとうく

『何方どちらへ行いらつ  
『何方どちらへ行いしやいます。』と口くちを切きつた。

『湯ヶ原ゆはらへ行ゆふと思おもつて居ゐます。』と自分じぶんがこれに應おうじた。思おもつ

て居ゐるどころか、今いま現げんに行ゆきつゝあるのだ。けれど斯かふ言いふの

が温泉場をんせんばへ行ゆく人ひと、海かい水すい浴場よくちやうへ行ゆく人ひと乃至ないし名めい所いしよ見物けんぶつに

でも出掛でかける人ひとの洒落しやれた口調くちうであるキザな言葉ことばたるを失うしなはない。

『湯ヶ原ゆはらは可いい所ところです、初はじめてゞすか。』

『一二度ど行いつた事ことがあります。』

『宿やどは何方どちらです。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益々ますます可いやうです。

さうだね君。』と兔角言葉の少ない鈴木巡査に贊成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでしょう。』と

關羽の鈴木巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だんく談話に花がさいて

とうきようはくらんくわい、うはさ、まなづるきんかい、ぎよれふだんとう、たいくつまぬか、東京博覽會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免

れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ。』と齋藤巡査が威勢をつけた。

『義母これから下りですよ。』

『さう。』

『随分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』  
『さうですか。』

齋藤巡查が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

日は暮れかゝつて雨は益々強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が門川で下りて、更に人力車に乗りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思があつた。





# 青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第四卷」学習研究社

1971（昭和46）年2月10日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年7月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 湯ヶ原ゆき

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>